



世界のかなたの森 / The Wood beyond the World (1894) / ウィリアム・モリス (小野二郎訳) / 晶文社 (10/15刊・¥1,200)

昔、海辺のラングトンと呼ばれる町に、ウオルターという若者がいた。美しい妻があつたが、不仲となり、彼は旅に出ようとする。その港で、不思議な三人連れ——世界のかなたで、やがて知り会はずの、女王、侍女、小人——を目にとめるのだ。物語には、ウォルターが永遠の恋人侍女と結ばれ、かなたの国の王位につくまでが語られている。

『ユートピア便り』で知られる、ウィリアム・モリスの描く、長編ファンタジイである。モリスは、社会主義の思想家でもあり、詩人、装飾家など、総合芸術家といつてよい人物だった。だが、本作を含む、散文ロマンスは、かならずしも評価されていたわけではない。本書も、彼自身の出版社から、手刷りで出されたマイナーなものである。荒俣宏は、本書を、ラファエル前派の小説への影響下に書かれた、ユートピア小説と指摘する。十九世紀末、ある意味での「テクノロジー変革期」だったこの時代で、自然への回帰、中世への帰還を求めるその姿勢は、今日のSFの立場とは、全く逆かもしれない。しかし、物語のたわいなのが感じとれるのも、また事実である。(俊)